

伝記の現状と科学者伝記の役割

坂 井 任

Tsutomu SAKAI

1. はじめに

2000年以降ノーベル賞の自然科学系3賞を受賞した日本人は、2012年の山中伸弥まで、アメリカに帰化した南部陽一郎を含めて11人である。これは、湯川秀樹が1949年に日本人として初めて受賞してから1999年までの半世紀間に5名であったのに比べ、かなりのハイペースである。

日本は科学技術立国と言われ、実際ノーベル賞受賞者数に見るように、一定の存在感を示してきた。それは、多くの科学者・技術者を生み出してきた教育の成果でもある。

2008年度にノーベル物理学賞を受賞した益川敏英は、地元の名古屋大学で世界的な成果をあげている坂田昌一のことを新聞報道で知ったのがきっかけで物理を志し、実際に坂田研究室へ進んだという（益川2008）。

小学生のになりたい職業ランキング¹を見ると、男子のランキングには、野球・サッカーといったスポーツ選手、医者・運転手・大工・教師などの他に、学者・研究者・科学者があがっている。テレビなどで活躍を目にするスポーツ選手や、身近に接したり目にする機会のある職業と違い、近年アウトリーチ活動が盛んになっているとは言うものの、小学生にとって研究者に直接会ったりテレビなどを通じて目にする機会はまだ少ない。

それにもかかわらず、小学生が学者に対してあこがれを抱くのは、学者のイメージを何かを通じて与えられているからである。その一つの可能性として挙げられるのが、伝記である。後で見るように、学者の伝記のほとんどは科学者を取り上げたものである。したがって、子どもがあこがれる学者のイメージは、科学者に対するものが大きな

割合を占めると思われる。

科学は事実の知識体系であるが、科学を作り上げるのは科学者である。実際の研究活動は、はたから見ると地道なものも多く、決して派手なものではない。しかし、時に発見が劇的な形で行われることもある。発見の経緯自体は地味であっても、そこに至るまでの努力、苦難を乗り越えた精神力が感動を与えることもある。

科学者が研究対象とするものへの興味から、科学者にあこがれる可能性もあるだろう。昆虫少年・少女が昆虫学者にあこがれ、天文少年・少女が天文学者にあこがれるような例である。

しかし、科学の中身は難しそうでよく分からないが、偉大な発見をした科学者の話を聞いて、自分も世のため人のためになるような研究をしたいというあこがれ方もあるだろう。このようなきっかけを与えるものとして、伝記は大きな割合を占めていると考えられる。

科学技術立国と言われ、この先もそれを志向している日本であるが、その基盤は決して盤石ではない。研究者のタマゴとなる大学院生は増えたものの、博士号取得後も常勤的な研究職に就けない人があふれ、せっかく育てた人材を活用できていない（榎木2010）。そうした状況を忌避して、博士課程進学者が減り始めてさえている。

そのような厳しい現実の中でも研究者を目指す原点には、前述したような素朴な夢があるだろう。そこで、夢をもつきっかけを与える「科学者の伝記」について考えてみる。

この論考では、まず伝記をめぐる現状を国語教科書への採択状況²と子供向け伝記全集の出版状況から捉える。その中で、科学者の伝記がどのように位置づけられるかを見て、科学者の伝記の役

割を考察する。

2. 伝記をめぐる現状

伝記と言えば、読書感想文の定番の一つで、小・中学生の頃に読んだ思い出のある人も多いであろう。人が生まれてから死ぬまでを時系列に記述するスタイルは、物語の構造として単純で分かりやすいうえ、適度な分量で話が完結する。

しかし、国語教科書に採択されている割合や、伝記全集の出版状況を見る限り、伝記は苦戦していると見ざるを得ない。以下では、小・中学校の国語教科書に伝記が取り上げられる割合と、現在どのような児童向け伝記全集が出版されているのかを見て、伝記の置かれた状況の変化を捉える。

2.1 国語教科書

伝記は中学校の国語教科書には現在取り上げられていない。伝記が採用されたのは、昭和62年から平成2年まで使用された教科書が最後で、平成2年から使用された教科書以降は、1点も登場していない。

現在小学校の国語教科書を発行する5社のうち、光村図書出版以外の4社の教科書に伝記が取り上げられている。三省堂は二つの学年で採用、教育出版は6年生の教科書で2点を採用、東京書籍と学校図書はともに手塚治虫を採用しており、全部で5名の人物がのべ6回登場している。

教科書は、発行する出版社が減少し、出版点数自体が減っているため、教科書に登場する人物の数が減るのは当然である。しかし、伝記作品の掲載数を教科書の数³で割った比率を見ても、年代とともに減少して来たことがわかる（坂井2005）。現在の小学校国語教科書でこの比率を計算すると、30冊に6点が掲載され、0.20ということになる。昭和40年代の教科書では、この比率が0.38であった。

2.2 伝記全集の出版状況

表1は、2012年9月時点で出版されている伝記全集（10巻以上のもの）である。ただし、作曲家だけを集めたものなど、特殊なものは除いた。ミネルヴァ書房以外は日本児童図書出版協会⁴に属

する出版社である。シリーズの中の全ての巻が現時点で出版されているわけではなく、一部の巻が品切れまたは絶版になっているものもある。対象学年が冊子やホームページなどに記載されている場合は記した。刊行が開始された年も記してある。

伝記全集というと、読み物のイメージがあるが、現在の出版状況を見る限り、まんが版の伝記全集が読み物を圧倒している。これが、教科書から伝記作品が消えた結果、読み物としての伝記に馴染みがなくなったためなのか、あるいは、活字離れを意味しているのかは分からない。おそらく両方とも原因になっているのだろう。

2.2.1 読み物としての伝記

読み物としての伝記全集は、発行点数も少なくなっているが、全集それぞれを構成する巻数も少なくなっている。例えば、ポプラ社『おもしろくてやくにたつ子どもの伝記』シリーズは20巻で構成されている。同じポプラ社からかつて刊行されていた『世界伝記全集』（1965年初版刊行）は、40巻から構成されていた。1970年代頃までの伝記全集には50巻で構成されているものも多く、多彩な人物が取り上げられていた。

現在の伝記全集に見られるもう一つの特徴は、資料のページが充実していることである。かつての伝記全集は年表がついている程度であったが、現在は他にも多様な資料がつけられていて、調べものができるように工夫されている。

2.2.2 漫画版伝記全集

漫画版伝記全集は、いわゆる「学習まんが」というジャンルで出版されているものである。4社から7シリーズが出版されている（学研『学研まんが伝記シリーズ』は6点と少ないので、表1からは割愛した）。

注目されるのは、偉人伝に取り上げられる人物といえは定番になっている人物が多いのであるが、これまで取り上げられることのなかった人物を意欲的に取り入れていることである。例えば、以下の人物をご存じだろうか。⁵

エリザベス・ブラックウェル
マリア・フォン・トラップ
アメリア・イアハート

ターシャ・テューダー

これらはいずれも集英社『学習漫画世界の伝記NEXT』にあるラインアップである。集英社からは、『世界の伝記』『日本の伝記』『世界の伝記NEXT』と合計76巻が出版されていて（他に別冊が1点ある）、それぞれ違う人物が取り上げられているので、実に多彩な人物が登場する。

小学館『学習まんが人物館』も、46巻を数える。

伝記は、漫画版によって新しい展開が与えられていると言える。

2.2.3 登場人物の変遷

伝記全集には、今も昔も変わらず登場する定番の人物がいる一方、新しく登場した人物もいる。そこで、新旧の伝記全集に登場する人物を比較してみたのが表2である。古い伝記全集として選んだのは、偕成社『児童伝記シリーズ』である（以下「旧シリーズ」）。1969年に刊行が開始され、1971年に全50巻の刊行が完結している（絶版時期は不明である）。新しい全集としては、巻数が多い小学館『学習まんが人物館』（46巻）を選んだ（以下「新シリーズ」）。1996年より刊行が開始されており、刊行継続中と考えられる。なお、巻数としては講談社『火の鳥伝記文庫』が最も多いが、現在品切れ中の巻が多々ある。

伝記に登場する人物は、比較的少数の分野に分類できる。伝記に取り上げるのに値する業績をあげられる分野は限られるためである。どんなに人格高潔であろうと、普通に暮らしている一般の人が伝記に取り上げられることはない。

『子どもの本 伝記を調べる2000冊』（日外アソシエーツ2009）では、次のように分類している。

歴史の中の人びと

（世界・日本と時代でさらに細分）

未知の世界を切り開いた人びと

— 探検家・冒険家

社会につくした人びと

— 教育者・社会事業家

科学の発展に貢献した人びと

— 科学者・宇宙飛行士

自然の謎にいどんだ人びと

— 生物学者・博物学者

医学の進歩のために努力した人びと

— 医学者・薬学者

新たな事物を作りだした人びと

— 発明家・実業家

芸術の才能を開花させた人びと

— 芸術家（画家・建築家、音楽家・俳優にさらに細分）

スポーツの世界で活躍した人びと

— スポーツ選手・監督

すぐれた文学作品を生み出した人びと

— 作家・文学者

独自の思想を打ち立てた人びと

— 学者・思想家

教えを開き広めた人びと

— 宗教家・僧侶

ここでは、上記の分類を参考にして、各シリーズの登場人物のジャンル分けをしてある（表2参照）。人物の名は、本のタイトルに表記されている通りにしたため、表記の揺れがあるものもある（マリー・アントアネットなど）。曖昧さ回避のため、（ ）内に通常呼ばれる名を一部併記した。複数の分野にまたがる可能性のある人物もいるが、記載は一度だけとした。⁶

一見してわかるのは、新シリーズでは「宗教家・思想家」が全く消えていることである。また、「社会活動家」と「文化人・スポーツ・その他」には、以前の伝記全集には取り上げられなかった人物が複数登場する。

社会活動家の分野には、ヘレン・ケラー、ナイチンゲール、アンネ・フランク（表2の旧シリーズには登場しないが、以前から伝記には取り上げられていた）といった定番の人物に加え、杉原千畝、マザー・テレサ、ダイアナ妃、レーナ・マリアといった、1970年頃には知られていなかった人物が登場する（マザー・テレサのノーベル平和賞受賞は1979年である。ダイアナ妃は1981年にチャールズ皇太子と結婚した）。

文化人の分野では、ウルトラマンなどの特撮で知られる円谷英二、漫画家の手塚治虫、藤子・F・不二雄が登場している。

「社会活動家」の分野の人物を見ると、近年ボランティアや慈善活動への社会的評価が高まって

いることに重なる。カーネギーや渋沢栄一のように慈善活動で取り上げられている人物は以前からいるが、金持ちの篤志家のイメージが強い。ボランティアが自ら参加する身近なものとなった社会の変化が反映されているのではないか。レーナ・マリアの採用も、障害者に対する庇護から共生へという意識の変化と重なるように思える。

漫画家二人の採用は、明らかに漫画に対する社会的評価の高まりを示している。1970年頃はまだ、漫画は子供の読むもので低俗な文化という意識が強かった。現在では、日本の漫画は世界中に広まり、クール・ジャパンの代表である。

なお、マザー・テレサと手塚治虫は小学校の国語教科書にも登場している。

新シリーズには、もう一つ顕著な特徴がある。それは、登場人物に女性が多いことである。旧シリーズでは、女性はヘレン・ケラー、ナイチンゲール、キュリー夫人、紫式部の4人のみである。新シリーズでは、紫式部は採用されていないものの、クレオパトラ、ジャンヌ・ダルク、エリザベス1世、マリー・アントワネット、津田梅子、アンネ・フランク、マザー・テレサ、ダイアナ妃、レーナ・マリア、与謝野晶子、高村智恵子、ローラ・インガルスと実に12人が加わり、3分の1近くを占める。

もちろん、登場人物の多くは、まだ女性の社会進出が進んでいなかった時代の先人である。しかし、女性の社会進出が進んでいる現代では、女性のロールモデルも必要である。伝記の役割の一つがロールモデルを与えることであるなら、女性の登場人物が増えるのも必然である。意図したのかどうかはわからないが、伝記の読者に女性を取り込む効果もあるのではないかな。

実は、読み物版の伝記全集の登場人物は、巻数が絞られていることもあって、マザー・テレサなどごく少数を除いて旧来の伝記全集と変わらない。大きな変化が見られるのは、漫画版の全集においてである。上述の女性が増えている傾向は、他の漫画版伝記全集にも見られる。前節であげた4人も全て女性である。社会活動家や漫画家というのは多少傾向が違うが、登場人物の分野の多様化もやはり見られる。時代の変化に対応する能力に長けるのは、今や漫画なのかもしれない。

3. 科学者の伝記

科学者は、伝記の中ではよく取り上げられる題材である。よく取り上げられるのは、取り上げやすい内容上の特徴があるからだと考えられる。

ここでは、教科書や伝記全集にどのような科学者が登場するかをまず挙げ、内容構成上科学者の伝記にはどのような特徴があるかを考える。

3.1 伝記に登場する科学者

戦後の小中学校国語教科書におけるキュリー夫人（マリー・キュリー⁷⁾の採録回数を調べた結果（幾田2007）によると、小学校では5編が延べ23冊、中学校では、伝記10編が延べ36冊、読書感想文などその他の形で登場するものが4編7冊ある。小学校の教科書には、昭和26年度から平成3年度まで41年に渡って採録され続けた。連続して採録が継続した期間では最長で、途中採録が中断したものまで含めても見ても、ファールブルの延べ46年、宮沢賢治の延べ44年に次ぐもので、女性としての採録回数も最多だという。

キュリー夫人伝には、規範的な人物としてのエピソードが多い。幾田は、教科書に記載されたエピソードを「努力」「家族愛」「利他心」「学究・向学心」「愛国心」「夫婦の協力」「夫への敬愛」「よき母」に分類し、多くの教科書に取り上げられてきた理由であると分析している（幾田2007）。

マリー・キュリーに限らず、後世に残るような発見をした科学者は、真理を求める探究心を持って人並ならぬ努力をしたのには違いない。しかし、教科書や偉人伝全集に取り上げられるには、重要な発見をしたというだけでは不十分で、やはりマリー・キュリーのように人間性に関わる、教訓的なエピソードが必要なようである。そこで、教科書や偉人伝にどのような科学者が取り上げられているか見てみよう。

小学校の教科書には、先に挙げたキュリー夫人、ファールブルの他に、ガリレイ、ルーサー・バーバーク⁸⁾、北里柴三郎、牧野富太郎、エジソン、パスツール、フランクリン、野口英世、ニュートン、豊田佐吉が取り上げられた。⁹⁾江戸時代の科学者として、伊能忠敬、緒方洪庵の名も見える。科学者ではないが、科学ジャーナリスト

で『沈黙の春』の著者のレイチェル・カーソンが平成8年から取り上げられるようになった。¹⁰ 近年の環境問題への意識の高まりを反映していると思われる。平成23年の教科書から、女性科学者の猿橋勝子が登場している。¹¹ 一般への知名度はまだ低い、女性科学者への奨励賞である猿橋賞を創設したことで知られる。

中学校の教科書には、近年は伝記が採用されていないが、昭和50年代までにはキュリー夫人の他に、ダーウィン、野口英世、北里柴三郎、高柳健次郎¹²が登場している。また、江戸時代の科学者として、前野良沢、麻田剛立・間重富・高橋至時¹³が登場している。

教科書の伝記に登場する人物の中で、さらに科学者となると、極めて限定される。そこで、小・中学生向けの伝記全集の中で取り上げられている科学者を見てみよう。

表1には、現在発売されている伝記全集のタイトルにある科学者をリストした。ここで、科学者の範囲は広くとらえ、発明家、技術者、科学ジャーナリスト（レイチェル・カーソン）、動物作家（シートン）、江戸時代の発明家・技術者（伊能忠敬、平賀源内）など、その業績が科学的知識に基づいている人びとも含めてある。

表1にある伝記全集に登場する科学者の中で、最も多く取り上げられているのは野口英世で、8種類の全集に取り上げられている。以下、キュリー夫人(7)、エジソン(6)、ファールブル(6)、ガリレイ(5)、ライト兄弟(5)、アインシュタイン(4)、伊能忠敬(4)と続く。

多く取り上げられている科学者は、以前より取り上げられ続けている人びとである。表1の中でも、科学者に関しては新しく取り上げられている人は少ない。安藤百福、本田宗一郎は、確かに発明家・技術者であるが、事業家としての側面が強い。

伝記に登場するには、偉人としてのエピソードが抽出される必要がある。貧しい人に奉仕したマザー・テレサ、漫画を表現手段として数々の名作を生み出した手塚治虫は、業績がそのままエピソードになる。しかし、科学者の場合は、傑出した発見をしても、そこに発見の物語がなければならぬ。発見自体は平凡に行われることもあり、

必ずしも物語があるわけではない。DNAに関する発見や、レーザー、トランジスターの発明など、戦後にも重要な発明・発見はあるが、これらが伝記に取り上げられるには、エピソード化がされなければならない。

表1を見ると、科学者の割合が20～30%になる全集が多くある。伝記全集の巻数に比して、科学者の採用される割合は非常に高いことがわかる。これは、科学者というものが、その性格上否定的な評価がしにくく、誰からも肯定的に評価されるためだろう。特に、子供向けの伝記は、原則的にはその人物を肯定する立場で書かれる。例えば、豊臣秀吉と徳川家康は偉人伝によく登場するが、同じ出来事でも主人公が善、敵になる側が悪として描かれる。この点、ヒトラーのように負の評価がほとんどである人物でも取り上げられる大人向けの評伝とは異なる。

科学者の場合、対立があったとしても多くは研究上のもので、通常は勝者となった故に発見者として記録され、偉人伝の主人公となる。対立するものが研究を離れた社会的なものである場合もあるが、例えば、ガリレイの宗教裁判、アインシュタインや湯川秀樹の核兵器廃絶運動、野口英世の貧困や障害への偏見などは、通常その克服自体が称賛される所以となっている。そのため、人物像を描く上で、功罪相半ばして評価が分かれるというような矛盾がない。¹⁴

また、科学的な成果は普遍的で、歴史のように解釈の変化により評価が反転するような事態も起きにくい。¹⁵

過去には偉人伝全集によく取り上げられていたが、表1に挙げた最近の偉人伝全集には全く見られなくなった例に探検家リビングストンがいる。リビングストンは、19世紀にアフリカ奥地を探検し、ヨーロッパに未知なる土地の知識をもたらした。冒険物語は子供への受けもよく、伝記の題材としても好まれたであろう。しかし、一方で、彼自身は奴隷売買に反対したにしても、結果的にその後の植民地支配へとつながったという負の評価もある。大航海時代が「地理的発見」の時代ではなく「(ヨーロッパ人にとっての)地理的知識の拡大」と言い換えられるようになり、双方の立場に配慮されるようになった例に見る通り、植民地

支配から独立した側への配慮から、子供向けの伝記としては採用しにくくなったのであろう。¹⁶

科学者の場合、発見の価値は人類共通のものであり、発見の先取権に変更がない限り歴史的な評価も揺るがない。

3.2 科学者伝記の特徴

内藤俊史によると、偉人伝の一般的な内容は、①歴史的または文化的状況の情報、②さまざまなエピソード、③業績に至る行動や性格の記述の三つから構成される（内藤1992）。ここでは、科学者の伝記について、内容構成の特徴を考える。

3.2.1 背景知識の記述

科学者の伝記の場合、歴史的・文化的状況の情報の他に、発見の背景にある科学的知識が加わる。それは、その人物があげた業績がどのような発明・発見なのかということだけでなく、その人物が従事した学問は何を対象とした学問なのか、その発明・発見が当時の社会にどのような影響を与えたのか、また、現在の社会にどのような関係があるのかといったことも含まれる。

細菌学の研究者（野口英世¹⁷、北里柴三郎、パスツールなど）や発明家（エジソン、ライト兄弟、豊田佐吉など）は、業績やその社会的意義が理解されやすい。一方で、業績の内容が難解で、簡単に説明できないこともある。この場合、業績はその人物を権威づける要素として作用する。

例えば、アインシュタインの科学上の主要業績は相対性理論だが、日常生活の感覚とは隔たった結論を導くこの理論は、大人であっても一般の人が理解するのは容易ではない。一般の人がアインシュタインに抱くイメージは、天才の代名詞という程度のものだろう。

相対性理論の帰結の一つである質量とエネルギーの等価性は、原子爆弾のアイデアにつながる。ルーズベルト大統領に原爆開発を促す手紙にサインしたアインシュタインが、原爆投下の惨劇に衝撃を受け、平和運動へと進んでいくことが、もう一つの（分かりやすい）業績として語られる。¹⁸

同様の例は、湯川秀樹にも見られる。中間子の交換が核力を生み出すことを非専門家に理解させるのは難しい。湯川の場合は、科学的発見そのもの

のよりも、発見がノーベル賞という評価につながったことが業績として語られる。

3.2.2 エピソードの記述

エピソードは、伝記の中で特に印象に残る部分である。多くの場合、その人物の性格や人格を規定したり、人生の転換点の役割をする。

エピソードの中には、史実性すら怪しい、伝説に近いものもある。例えば、一休が頓知小坊主であったことや、ワシントンが桜の木を切ったことを正直に言った話などである。それにもかかわらず、こうしたエピソードが盛り込まれるのは、エピソードが無ければ無味乾燥な記録になってしまうからである。エピソードは伝記に物語性を与える重要な道具として容認されていると見えて、子供にウソを教えるとは、などという非難も聞かれない。

科学者の場合にも、こうしたエピソードはある。ガリレイがピサの斜塔から重さの違う二つの玉を落として、同時に着地することを示した逸話や、ニュートンがリンゴが木から落ちるのを見て万有引力を発見したという類の話である。

発見は、科学者の伝記の中心事項であるから、史実かどうかあやふやでも、発見時のエピソードがあると伝記としては面白い。しかし、実際には発見時の劇的なエピソードなど見当たらない被伝者の方が多い。伝記の中でも発明や発見は地道に行われていることが多い。野口英世は顕微鏡を覗いて病原菌を発見し、キュリー夫妻は大量の鉱石を酸で溶かしてラジウムを分離する。

子供時代や若い頃のエピソードは、科学者に限らず大半の伝記に出て来る。しかもそれは、被伝者の人物像を規定するものであったり、その後の人生を決定づけるものであったりと、重要な役回りをする。

特に、読者自身が成長の過程にあるなら、同年齢の時期のエピソードは強い印象を与えるはずである。貧しい家庭に生まれ、幼少時に火傷のため手に障害を負った野口英世が、周囲の善意で手術を受けられたことがきっかけで医学を志すという、日本人なら誰もが知るエピソードなど、その典型である。

家庭環境や家族との関係が語られることも多

い。これも、家庭と学校での生活が大半を占める児童・生徒にとって、感情移入しやすい点である。

人生の転換点が後半生に来る例もちろんある。死の商人と言われたノーベルが、遺産を賞の創設に使うよう遺言する話などがそうである。

科学者の場合、キュリー夫人の例に見たように、忍耐や努力を表すエピソードが多い。それは研究というプロセスが必要とするものであり、偉大な業績をあげる科学者が一般に持つ資質だからであろう。

3.2.3 業績に至る行動や性格の記述

前節でも見たように、科学者の多くに共通して記述されるのが、忍耐と努力である。研究に没頭する集中力が語られることもある。例えば、ニュートンの伝記には、研究に没頭するあまり懐中時計を卵と間違えてゆでしてしまうエピソードが出て来るが、他愛のない出来事でも伝記の文脈では効果的な役割をする。

研究というものの性格上、科学者がその業績に至るには、ある程度の時間をかけて行動することになる。この点、戦国武将のように咄嗟の機転や瞬時の判断が成否を分けるのとスピード感が違う。したがって、根気強さや一途さといった精神的傾向を伴った行動が語られる。

地動説を唱えたコペルニクスや「それでも地球は回る」と言ったガリレイのように、信念を曲げないことが行動や性格として語られることもある。

4. 伝記の役割

勝尾金弥によると、戦前の伝記は「著者を代表とする『おとな』が、個々の被伝者の心がけを模範として学ぶべしという姿勢で、少年読者に与えたものにほかならなかった」(勝尾1999)。1938年には内務省から出された「児童読物ニ関スル指示要綱」の中で、物語を減らして伝記を含む歴史読物をふやすように各出版社に求めた(勝尾1999)。

ここに見られるのは、伝記がもつ教育的役割を国家教育に利用しようとしたということであろう。実際、『伝記児童文学の歩み 一八九一から一九四五年』にある伝記の出版年表には、1939年以降、軍神と称される人びとの名が頻出する(ヒ

トラーすら偉人として登場する)。終戦とともに、これらの人びとのロールモデルとしての役割は終わったわけだが、偉人伝に登場する人物に何らかの見習うべきものを求めるのは現在でも変わらないだろう。そこで、伝記とその登場人物にどういう役割が求められるのかについて考えてみる。

勝尾は、伝記に対する意識は、子どもと大人で異なると述べている。子供は被伝者の人生を「現実感に支えられた生きたドラマとして楽しむ」。一方で、大人にとって被伝者は、「あくまでも歴史上の人物にほかならず、客観的な対象でしかない」という(勝尾1999)。その上で、子供が伝記を読みたがるわけを次のように説明する。

それに対して、子どもの場合は、どの子の人生も全く未知数であり、あらゆる可能性が各自に与えられている。だからこそ子どもたちは、さまざまな生涯を送った先人たちの伝記に、自らの未来図を重ね合わせようとする。(中略)それは、子どもたちのうちにひそむ可能性という点から発した、ごく当然の欲求なのである。つまり子どもが伝記を読みたがるのは、子ども本来の固有の欲求であり、読む権利を与えられているのである。(勝尾1999)

子供の読書は子供の未知の世界への好奇心にまかせればよいのであって、そこに道德教育的な思惑を持ち込むのは本当は余計なことなのかもしれない。子供時代に伝記をわくわくしながら読んだ人は、伝記から徳目を学んでやろうと思ったのではなかっただろう。

しかしながら、伝記が大人から与えられるものである以上、そこには被伝者の人生から何かを学んで欲しいという思惑が必然的に入ってくる。そして、それは押し付けであるから良くないというものでは必ずしもない。結局、そこには、このような人になって欲しい、このような社会を実現して欲しいという願望があるのである。未来がどうあるべきか、指針を与えるのも大人の責任である。

科学者の伝記の役割は何かと考えると、重要なものの一つは、規範的な人生のプロセスを教える

ことではないだろうか。伝記に語られる科学者の人生を最大公約数的にまとめると、その道に志し、勉強して、忍耐強く努力を重ね、困難を克服して、偉大な業績をあげる、というのが典型だろう。こうした人生を送るのは科学者に限らないが、研究というものの性質上、科学者の人生はこういう過程をたどっていることが多い。

一方、武将などの例に見られるように、時代が激しく変化する中では、このような直線的な人生を送るのは難しい。

上記の人生のプロセスは、学校を出て就職し、その中で自己実現をして行くという現代人の生活に最も近い。そのため、現実的なロールモデルとしてとらえることが可能になる。

もちろん、科学者の伝記であるから、その背景知識の説明を通じて科学リテラシーを高めるという効果もある。世の中にはどのような学問があるかということだけではなく、発想の仕方や科学的な論理も学ぶことができる。

また、科学的成果は人類に共有される普遍的な価値である。そうした価値は先人が積み上げてきたものであり、現在の我々もその恩恵を受けていることが理解できる。

5. おわりに

本論考では、まず伝記が読まれている状況を教科書と出版物の現状から探った。教科書と伝記全集は無関係ではなく、教科書に採択される前にまず優れた伝記が必要である。そうだとすると、顔触れもあまり変わらず、発行点数も少ない読み物版の伝記の現状は少し気になるところである。

偉人とは優れた業績をあげ、人びとから顕彰される人のことであるが、伝記に語られる偉人になるには、それだけでは不十分である。これまで見てきたように、伝記を構成するにはエピソードが必要である。貧農の家に生まれ黄熱病に斃れる野口英世や、貧しい家庭で苦学し最後は放射線の影響で死に至るキュリー夫人のように、人生をまるごと語るだけのエピソードに満ちている人は実は少ない。

2000年にノーベル化学賞を受賞した白川英樹は、共同研究者が触媒の量を間違えたため偶然伝

導性プラスチックの作成に成功した。近年でもこのように面白い発見のエピソードというのは単発的にはある。しかし、野口英世やキュリー夫人のように困難とその克服に満ちた人生というのはなかなかない。それだけ安定した社会になったということかもしれない。

原発事故の際、放射線の正しい理解の必要性が叫ばれたように、科学リテラシーの重要性が増している。しかし、最新の科学は専門家以外にはますますブラックボックス化している。一般人にとってだけでなく、科学者でも専門が違えばそうである。

科学をわかりやすく伝えるサイエンス・コミュニケーションも最近重要になっているが、エピソードを上手く利用した伝記の記述法は、効果的なサイエンス・コミュニケーションのヒントにもなるのではないだろうか。

注

¹ 「なりたい職業ランキング」は、様々な団体から発表されている。例として、第一生命調査、ベネッセ教育研究開発センター「子ども生活実態基本調査」をあげておく。

² 教科書作品の内容については、『中学校国語教科書内容索引—昭和24～61年度（上・下巻）』、『読んでおきたい名著案内 教科書掲載作品 小・中学校編』を参考にした。

教科書の数については、公益財団法人教科書研究センター「教科書目録情報データベース」(<http://www.textbook-rc.or.jp/library/index.html>より利用できる)を参考にした。

³ 学年で上・下巻に分かれているものは、合わせて1冊と数えた（上・下に分かれていないものもあるため）。

⁴ 日本児童図書出版協会 <http://www.kodomo.gr.jp>

⁵ エリザベス・ブラックウェル（1821-1920）は、女性として初めて医師になった人物である。

マリア・フォン・トラップ（1905-1987）は、ミュージカル『サウンド・オブ・ミュージック』のモデルとなった家族合唱団トラップファミリーの母親である。

アメリア・イアハート（1897-1937）は、アメリカの女性飛行士である。女性初の大西洋単独横断飛行に成功したことなどで知られる。

ターシャ・テューダー（1915-2008）は、スローライフを実践したことで知られる絵本作家である。

⁶ フランクリンには、雷が電気であることを示した科学者としてのエピソードもあるが、アメリカ独立に関する業績を大として、政治家とした。

アンネ・フランクは、自分で意図したのではないが、

『アンネの日記』に記された彼女の人生が平和の尊さを教えるものと受け取られているので、平和運動家に入れた。

ダイアナはイギリス皇太子妃であったが、政治的権力はなく、慈善活動などで評価されるので、社会活動家に入れた。

レオナルド・ダ・ビンチは、科学者としても知られているが、ここではモナリザなどで知られる画家として分類した。

宮本武蔵は剣術家であるが、武将として名を成したのではなく、『五輪書』や水墨画で知られるので、その他に入れた。

⁷ マリー・キュリーは、キュリー夫人という呼び方が定着しており、現在出版されている児童伝記などでも「キュリー夫人」のタイトルが採用されている。「夫人」は、女性の社会進出が進んだ現在の感覚からすると少し古い印象もあるが、ここでも慣用として使用する。

⁸ ルーサー・バーバーク (1849-1926) は、植物の発明家として知られ、多くの植物の品種改良を行った。エジソン、ヘンリー・フォード (フォード自動車創業者) と並び、当時アメリカの三大発明家とされていた。

⁹ 小・中学校とも、昭和40年以降の教科書に採用された人物を対象とした。

¹⁰ レイチェル・カーソン (1907-1964) は、学校図書の小学5年国語の教科書に平成8年から平成16年まで取り上げられている。

¹¹ 猿橋勝子 (1920-2007) は、三省堂『小学生の国語 六』に登場している。取り上げられている主要なエピソードは、ビキニ環礁の核実験で海洋に放出された放射性物質の濃度測定の精度を、海外の研究者と競ったというものである。

¹² 高柳健次郎 (1899-1990) は、世界に先駆けてテレビジョンの実験に成功した技術者である。

¹³ 麻田剛立・間重富・高橋至時の三人は、暦法の改正に寄与した江戸時代の民間天文学者である。

¹⁴ もちろん、人間である以上、その人物が負の評価を与えられるような曇りが一点もない人生を送ったわけではない。規範的なエピソードに満ちたマリー・キュリーの例でも、夫との死別後、ゴシップが報じられたことがある (ドライ2005)。このようなエピソードは大人向けの評伝には描かれても、子供向けの伝記に取り上げられることはない。

釈迦や良寛のように、享楽的生活や放蕩からの改心が取り上げられる例もある。

¹⁵ 天動説が地動説へと改められたような例が過去にはないわけではない。しかし、近年では一旦確立した理論が全く覆されることは稀である。アインシュタインに関して、相対性理論がニュートン力学を覆したと言われることがあるが、適用範囲さえ守ればニュートン力学はいまだ有効である。素粒子の運動には特殊相対性理論、ブラックホールの記述には一般相対性理論、GPSには両方の効果の補正が必要であるが、ロケットの軌道計算はニュートン力学で十分である。

大栗によれば、「物理学の確立した理論は、拡張されることはあっても覆ることはない」。「ある理論が新しい理論によって乗り越えられるというのは、より広い領域に当てはまる理論になるということである」(大栗2011)。

¹⁶ これ以外に、一般に冒険時代が遠くなり、探検物語があまり受けなくなっているということもあるかもしれない。支配される人びとがいなかった南極大陸を探検し、南極点に初めて到達したアムンゼンも、かつてはよく取り上げられたが、表1の伝記全集には取り上げられていない。

¹⁷ 野口英世については、梅毒スピロヘータの純粋培養やポリオ (小児麻痺)・狂犬病の病原体の発見など、偉人伝に登場した業績の多くが現在では否定されている (福岡2007, p.13-28)。野口の研究の詳細な検証については、父親が野口の知己であったプレセットによる評伝に詳しい (プレセット1987)。

¹⁸ 科学史的には、アインシュタインの主要業績は、相対性理論以外にも、ノーベル賞の受賞理由となった光電効果の理論、ブラウン運動の理論などがある。これらに対する説明も難解で、伝記からは省略されることもある。

引用・参考文献

- 幾田伸司 (2007) 「戦後国語教科書に描かれた女性像—『キュリー夫人』を中心に—」『鳴門教育大学紀要』22: 113-126
- 榎木英介 (2010) 『博士漂流時代』ディスカバー・トゥエンティワン
- 大栗博司 (2011) 「光よりも速く」岩波書店『科学』81: 1139-1141
- 勝尾金弥 (1999) 『伝記児童文学の歩み 一八九一から一九四五年』ミネルヴァ書房
- 国立教育研究所附属図書館・財団法人教科書研究センター 共編 (1986) 『中学校国語教科書内容索引—昭和24～61年度 (上・下巻)』財団法人教科書研究センター
- 坂井任 (2005) 「科学者の伝記から見る科学リテラシー」日本物理学会『大学の物理教育』11: 66-69
- ドライ, セアラ (増田珠子訳) (2005) 『科学者キュリー』青土社
- 内藤俊史 (1992) 「『偉人伝』の効用」金子書房『児童心理』46: 1841-1846
- 日外アソシエーツ編 (2009) 『子どもの本 伝記を調べる 2000冊』日外アソシエーツ
- 日外アソシエーツ編 (2008) 『読んでおきたい名著案内 教科書掲載作品 小・中学校編』日外アソシエーツ
- 福岡伸一 (2007) 『生物と無生物のあいだ』講談社現代新書
- プレセット, イザベル・R (1987) 『野口英世』星和書店
- 益川敏英 (2008) 「[2008年ノーベル物理学賞受賞記念講演] CP対称性の破れが我々に語ったこと」素粒子論グループ『素粒子論研究』116: 151-158

表 1 現在出版されている子供向け伝記全集と採録されている科学者

火の鳥伝記文庫（講談社）111巻 【1981刊行開始】	野口英世、エジソン、キュリー夫人、ライト兄弟、牧野富太郎、ガリレオ、ファール、北里柴三郎、伊能忠敬、ノーベル、豊田佐吉、ニュートン、日本のファールたち、南方熊楠、アインシュタイン、パスツール
伝記文庫D（ポプラ社）22巻 【1982刊行開始】[小学校中学年～]	野口英世、エジソン、キュリー夫人、ライト兄弟、ファール、湯川秀樹
おもしろくてやくにたつ子どもの伝記 ¹ （ポプラ社）20巻 【1998刊行開始】[小学校中学年～]	野口英世、ライト兄弟、キュリー夫人、エジソン、ファール
伝記－世界を変えた人々 ² （偕成社）20巻 【1991刊行開始】[小学5・6年から]	キュリー夫人、ブライユ ³ 、パストゥール、ダーウィン、ゲーテンベルク、ガリレオ・ガリレイ、アインシュタイン
コミック版世界の伝記（ポプラ社）22巻 【2011刊行開始】[小学校中学年～]	エジソン、野口英世、キュリー夫人、伊能忠敬、ガリレオ、ファール、北里柴三郎、
学習漫画世界の伝記（集英社）40巻 【1989刊行開始】	野口英世、エジソン、キュリー夫人、ノーベル、ライト兄弟、ガリレオ・ガリレイ、アインシュタイン、ニュートン、レオナルド・ダ・ビンチ、ファール、ジョイ・アダムソン ⁴ 、シートン
学習漫画日本の伝記（集英社）18巻 【1987刊行開始】	平賀源内
学習漫画世界の伝記NEXT（集英社）18巻 【2010刊行開始】	伊能忠敬、安藤百福 ⁵
学習まんが人物館（小学館）46巻 【1996刊行開始】	キュリー夫人、エジソン、野口英世、ファール、本田宗一郎 ⁶ 、南方熊楠、ライト兄弟、ガリレオ、シートン、ダーウィン、レオナルド・ダ・ビンチ
ドラえもん人物日本の歴史（小学館）12巻 【1995刊行開始】	なし
この人を見よ！歴史をつくった人びと伝 （ポプラ社）30巻 【2009刊行開始】[小学校高学年～]	本田宗一郎 ⁶ 、アインシュタイン、野口英世、アンリ・ファール、エジソン、レイチェル・カーソン、湯川秀樹
よんでしらべて時代がわかるミネルヴァ歴史人物伝（ミネルヴァ書房）24巻 【2010刊行開始】[小学生から]	伊能忠敬、野口英世

¹ 『ポプラ ポケット文庫 伝記』の番号072のシリーズとしても刊行されている。

² このシリーズは、翻訳を中心としているため、夏目漱石を除いて扱われているのは外国人である。日本の伝記全集とはかなり異なる人物が取り上げられている。

³ ブライユ（1809-1852）は、点字の考案者である。

⁴ ジョイ・アダムソン（1910-1980）は、『野生のエルザ』で知られる動物作家である。

⁵ 安藤百福（1910-2007）は、インスタントラーメンの発明者で、日清食品創業者である。

⁶ 本田宗一郎（1906-1991）は、本田技研を創業した技術者である。

表2 伝記全集に取り上げられた人物の比較

分類	偕成社 児童伝記シリーズ (50巻)	小学館 学習まんが人物館 (46巻)
歴史上の人物 政治家・武将など	源義経、北条時宗、織田信長、豊臣秀吉、徳川家康、勝海舟、西郷隆盛 フランクリン、ワシントン、ナポレオン、リンカーン、ケネディ	織田信長、豊臣秀吉、徳川家康、勝海舟、坂本龍馬、西郷隆盛 クレオパトラ女王 (クレオパトラ7世)、ジャンヌ・ダルク、エリザベス1世、マリー・アントアネット、ナポレオン、ケネディ
探検家・冒険家	コロンブス、リビングストン、アムンゼン	植村直己 コロンブス
社会活動家 社会事業家・教育者・平和運動家など	二宮金次郎 (二宮尊徳) ヘレン・ケラー、ナイチンゲール、シュバイツァー、ノーベル	津田梅子、八田與一 ¹ 、杉原千畝 ヘレン・ケラー、アンネ・フランク、ナイチンゲール、マザー・テレサ、ダイアナ (ダイアナ妃)、レーナ・マリア ²
学者 科学者・技術者・発明家	豊田佐吉、北里柴三郎、高峰譲吉、野口英世、牧野富太郎、湯川秀樹 ガリレオ、ニュートン、ワット、エジソン、ファーブル、キュリー夫人、ライト兄弟	野口英世、南方熊楠、本田宗一郎 ガリレオ、ダーウィン、エジソン、シートン、ファーブル、キュリー夫人、ライト兄弟
芸術家 音楽・美術・文学	紫式部、小林一茶、夏目漱石、石川啄木、宮沢賢治 ベートーベン、シューベルト、ミレー、アンデルセン	宮沢賢治、与謝野晶子、高村光太郎・智恵子 モーツァルト、ベートーベン、ショパン、レオナルド・ダ・ビンチ、ゴッホ、ローラ・インガルス ³ 、サン＝テグジュペリ
宗教家・思想家	一休ぜんじ (一休)、良寛さま (良寛)、福沢諭吉 おしゃかさま (釈迦)、キリスト	
文化人・スポーツ・その他	宮本武蔵 ベープ・ルース、ディズニー	円谷英二、手塚治虫、藤子・F・不二雄

¹ 八田與一 (1886-1942) は、台湾でダム建設などの水利事業に携わった技術者である。日本での知名度は低いが海外で評価されている人物の一人である。

² レーナ・マリア (1968-) は、肢体不自由の障害を抱えながら活動するスウェーデン人歌手である。

³ ローラ・インガルス (1867-1957) は、『大草原の小さな家』で知られる作家である。